

連載 同志会の教材をわかりやすく伝える

第3回 幼年体育の授業(1)へい

バランス良く育つには—意図的な保育を手掛かりに—

竹内進 (大和大学)

1. はじめに

昨年の夏、ある保育園に水あそびの実技指導に出かけた時のことである。その園には普段から体育あそびについて、定期的に観察・研修・検討といったことを、行っているために、お互いに顔見知りである。だから『K君がいないなあ』と気づき「Kくんの友達に聞いてみると、「うん。K君なあ、ずーっと休みやねん」と確認した。気になったので、実技指導終了後の打ち合わせ時に先生に質問した。「K君どうしたんですか？」すると、苦笑い気味の表情で「K君お受験のために、保育園休ませて8月いっぱい塾通いするそうなんです」と。『K君がお受験ですかあ…大事なことが他に…』で、お互いに顔を見合せながら「…ですよえ」と声が揃った。

K君は、一昨年から関わってきた園児の一人だが、色々と課題を抱えている園児の一人だ。この園では4・5歳合同縦割りのクラスで保育している園であるが、昨年4歳児クラス

のK君は、トラブルメーカーの一人だった。とにかく、私が訪問した毎日がトラブルの連続だった。一般的に保育現場では、4歳は5歳のお兄ちゃんお姉ちゃんの姿に刺激を受け憧れを寄せるといふ。ところがこの園の事情は違った。4・5歳の関係は最悪だった。ライバル関係だと言えそうだが、お互いへの優しさが無く、憧れを寄せるなんて皆無だった。4歳達は、5歳達がうまくいかないことを馬鹿にしたりののしたり。5歳達はプライドが傷つき、4歳達に対して敵対心しか持たない。そんな集団の姿であった。

2. 保育現場では

多くの保育現場での、体育的取り組みの中身は「個のからだの育ち」に目を向けているが、集団としての取り組みに欠けているように思われる。民舞やマーチングなど「表現活動」としての集団の取り組みはあるが、「鬼ごっこ」すら取り組んでない所

もあるのではないか？保育士にも子どもにも余裕が無く、必要性もわかっていないのかもしれない。そして一般的に今保育の現場では球技に取り組んでいる所が少ない様に思う。取り組んでいるところも、球技を教材としてではなく、ドッジボールや地域でのサッカー大会出場のためにやっているという所がほとんどではないか？と思われる。園庭も狭い所が多いので、小さい子も一緒に遊んでいる自由遊びの中でボールを扱うと危ない。そのためボールは自由には使えない所にしまわれている。そのためボール体験が少ない。文部科学省の、体力測定の結果分析により、一時期全ての体力が下がっていると報道されてきたせいか、色々と取り組みが進められ低下が止まり向上している分野も増えてきていると聞く。ただし投能力だけは上がってこない。

この結果は、やはり幼児期の経験の少なさが影響していないだろうか？そんな風に危機感を持っている。そして、色々な場面で幼児期の球技実践を研究し支援し、十分に結果を出してきた。そこで一昨年度秋に、前述した保育園に対し共同実践を申し入れて「タグラグビー実践」に取り組まさせていただいた。

この保育園は、大阪市内の街中にある園で、公立園のような広い園庭はなく、3階

建ての園舎で、夏には屋上に簡易プールが設置される。といっても、この園だけが厳しい環境であるというのではなく、街中の保育園ではよくある状況である。室内の保育室で「リズム運動」や「器械運動」に取り組んではいるが十分な環境下ではないので、様々な経験不足は否めない。運動会も園庭では行えないので、近隣の地域の広場を練習段階から借りて実施している。このような条件では「球技」を実施できる余裕は全くなく、球技を行わなければならない必然性もない。それでも、そういった状況下で「タグラグビー」の共同実践を申し入れたことに対して、了承して貰ったことは有難かった。しかし、共同実践を申し入れようとした当初は、幼児期の子どもたちに対しての「球技力をどのように付けていくのか？」という目的であった。しかし、実践スタートするまでの間、運動会への練習段階や、日ごろの保育の姿を見ていく中で、不安を感じながらの「タグラグビー実践」を始めていくことになった。

3. 実態に合わせた実践を

園の保育条件の兼ね合いから、4・5歳合同保育であるので、4歳11人5歳8人の計19人が対象となった。それぞれの子ども

たちは、前述したような問題以外にも色々な課題を持っていて、保育中のトラブルが絶えない。この姿は、多かれ少なかれ、どの園でも抱える4・5歳の子どもたちの課題だと思いが、この課題に対して、「タグラグビー実践」で迫ることが有効ではないか？と考えたのである。

【子どもたちの現状と課題】

*情緒不安に落ちおいたりやすい。

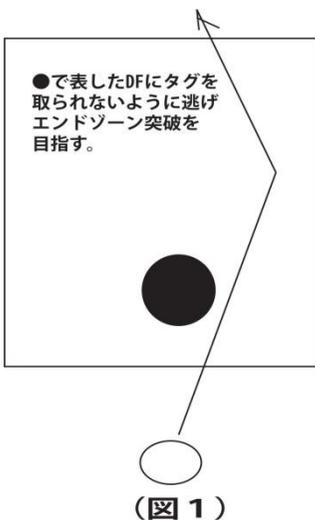
- ① 他児からの言葉（言葉に傷つく）
- ② プライドが傷つく（馬鹿にされる）
- ③ 表現が下手（言葉でうまく言えない）
- ④ 自信が無い（失敗することが怖い）
- ⑤ 負けたくない（負けることが許せない）
- ⑥ 集中力が欠ける（持続性がない）
- ⑦ 立ち直りが遅い（一端崩れると）
- ⑧ 優しさに欠ける（集団としての力不足）

【タグラグビーの目標とねらい】

- ① 勝ち負けに慣れる（負けることもある）
 - ② 遊びからスポーツへ（ルールの理解）
 - ③ 役割分担の導入（責任感と特別性）
 - ④ チームワークの確立（集団力を高める）
- このように、子どもたちの現状と課題を分析しつつ、タグラグビーの目標とねらいを設定し実践を始めた。経過と進め方は次の通りである。

園には月2回ほど行き、近隣の広場に移動しての、約1時間ほどの実践が中心であ

る。今回紹介できるのは、園の都合と私の都合とで実施できた11月以降の5回ほどの実践を終えての結果というよりは経過報告である。この実践では（1）大体の設定保育案を私が立案すること（2）実践で必要な教材については、私の大学のゼミの授業で学生たちが手作りで用意する（3）タグラグビーの部分は私が保育を進める。という形であった。まずは、いきなりタグラグビーに入るのではなく、園で前から実践したことのある鬼ごっこ（タッチ鬼や追いかけて鬼）などでウォーミングアップした後で始めた。まずは（図1）のように一対一での対決にした。チームは、じゃんけんでその場で決めてチーム分けしたが、明らかにチーム力が不均衡なチームが出来あがったり、時間がかかってしまった。チームを分けた後、対戦順番を決めるときもまたじゃんけん。しかし、対戦相手が決まると、



その相手を見て負けそうな相手だと、順番をこつそりと変わったり、やらないと言いだしたりする子もいた。守備はまだしも、攻撃ではタグを取られるという恐怖から「ドキドキするから嫌だ」と泣き始める子も出たり、対戦して、負けた途端にタグのベルトをはずし地面にたたきつけ「もうやらない」とその場からエスケープしてしまったりと、トラブルが絶えない。でも、一人でやれないという子には「一緒にやってみようか？」とか。負けてエスケープした子には「次は頑張ろう」といったように周りのメンバーが優しく声をかけたりも出る。だけど、また別の場面では、優しく声をかけてあげた子がトラブルを起こす。そんなことが常起こっていた。そのような時間ロスが起こることが多く、なかなか思い通りに事が進んでいかなかった。意気消沈してのビデオ編集作業は気分が滅入ったものだった。ところが、ビデオの中でトラブルの場面をカットし、プレー中の場面だけを繋げていくと、本当に子どもたちが生き生きと楽しんでいる姿があった。目の前の曇りがさっと取れた。

と言うことからすると、この共同実践はボール指導の系統性指導のあり方を研究するというよりは、目の前の子どもたちの課題に迫るには個々の「こころ」の部分に目

を向けることが必要だと考えた。そのために、この体育あそびを通して迫っていくことが大事である。そして集団をも変えていくことがねらいになるはずだと。そう仕切り直してみることにした。

4. 子どもたちの現状からスタートすること

そうすると、子どもたちの姿が、さらによく見えた。それまでは、保育の計画が立案した通り進めようとしていても、トラブルが次々に起こるので『なんでやねん』と、がつかりしたり焦ったりと、計画が予定通り進まないことにはばかり気が向いていた。ところが、ねらいを変えたことで子どもたちの姿がリアルに見えてきた。

今であれば当たり前のことなのかもしれないが、**トラブルには原因がある**ということがわかった。とすると、トラブルが起こる前にトラブルを起こさないように原因を排除することが大事なのだとわかってきた。といっても、次々にトラブルが起こるものだから追いついていけないということもあったのだが、何か**トラブルが起こってから「なぜそんなことをするの？」と話し分析し、分らせて反省させる**。この様な道徳的で対処療法的なスタイルではなく、**あらかじめトラブルが起こりそ**

うものを分析し、工夫したり排除し、トラブルの素を断つ。ということでも混乱が減った。すると、タグをベルトから外してチアガールのように応援したり、勝敗を楽しみにしたりも徐々に出てきたし、個人のスキルも上がってきた。守備者は攻撃者に出来るだけ近づき、相手の左右の動きをマークする。攻撃者は守備者の動きをよく見ながら油断した瞬間に一気に走りだしたり、右に行くと思わすかして、急な方向転換をしたり、スピードを緩めてから再度スピードアップしたりという高等技術も出たし、それを見て真似る子も出てきた。

合わせてルールレベルアップ(図2)も図った。黒丸に記した守備者は攻撃者の

TDゾーン (3点) 2点ゾーン



(図2)

主坊てるてる布黄色い玉を包み
ひもで縛る。てるてる
のよな形態の物



(図3)

判3人で相談する
と決めた。この
の制度は十分に
役割を果たすと
ころにいつてい
ないが、あれだ
け口々に言っ
た声は出なくな

前に最初から立てないように、1点ゾーンより後ろに立たせるようにした。そして、タグを取られても少しでも前に進めば得点できるように、ゾーンを決めた。最初はルールが理解できず、混乱していた子供たちも理解が進んでくると、「タグじやなしにベルトをつかんで止めてからタグを取ったからずるい」とか、「今のは2点じゃなく1点だ」というルールそのものに対する声も出てきた。ところが、それを気付いた子どもが口々に大きい声で言うものだから、言われた方は、非難されたという風に取り、癩癩を起してエスケープしたり、くっつかかって喧嘩をしたりが見られた。そこで副審制度を作った。主審は私が行うが、各チームから副審を1名ずつ順番に選び出し、手にはイエローフラッグ(図3)を持たせた。何かおかしいと思っても副審以外は言わない。副審はおかしいと思ったらイエローフラッグを投げてから、そのことについて審



判3人で相談する
と決めた。この
の制度は十分に
役割を果たすと
ころにいつてい
ないが、あれだ
け口々に言っ
た声は出なくな

また同じ頃、トラブルが起こってしまった、なだめたり励ましたりしている時間が長引いたりすると、集中力が切れてゲームへの興味を失う子どもたちが出ていたので、役割を増やすことにした。そこで教員が行っていた得点管理を、手作りの得点ボードで操作する係と、ボールを運搬する係なども順番に行うようにした。また、チーム分けの際、不均等を避けるために、力の似通った子ども同士を分けて作った2チームを固定し、毎回そのチーム対抗で行うようにした。このように子どもたちの弱点が問題行動に発展しないような工夫をすることで、その原因を少しずつ減らしていったのだ。しかし、根本的に月2回あるかないかの取り組みだけでは回数が少なく、「負けることもあれば勝つこともある」や「ずっと負

けてたけどやつと勝てた」といったような場面を作り出すことが難しかった。それと一対一の対戦は、やはり、男女差や年齢差がどうしても大きな壁となっていて、ゲームをする前から子ども自身も「勝てない」と悟ってしまうような対戦もあった。そのため、対戦順を固定して「力の似通った者同士の対戦にした方が良いのではないか？」と考えたりもした。しかし、回数が少ない中であまりにも「教員が配慮をしすぎるのも良くないかも？」と考え断念した。本来であれば、一対一から二対二に早く発展したいと考えていた。そうすることで一対一でのマイナスの要素になる、「歴然とした実力差がカバーされる」「精神的重圧の軽減」が、解消されるだけでなくプレーの進化に繋がる。(ガード、パスの発生やサインプレーへ)と、思っていたからだった。

5. 実践終盤には

他にも、手作りのタグが壊れやすく、子どもたちに嫌な思いをさせてしまったことが続いたので、正式な物を購入した。そして、対戦順が途中で混乱したり、意識的に変更したり(ずる)もあつたので、番号入りのビブスを用意して貰うと、役割の交代もスムーズに行えた。これらもやはり大事



なことであった。天候により、終盤の2回をやむなく保育室で行ったのだが、狭すぎで怪我しないかと心配したが、いつもよりは集中力が持続した。広場では広すぎて、周りの物に興味を持ってしまおうということもあったのかもしれない。お互いの都合もあり、計画していたより回数は少なく、まだまだ問題行動がなくなつたというわけでもないし、ねらいが達成できたというわけではない。ただし、プレー中の映像を編集していくと、問題行動が起こっている前後や周辺での子どもたちが、実に生き生きとしていて素敵だったことに気がついた。園

長先生をはじめ担任の先生の協力を頂きながら、ようやくここまで形付いたが、十分な成果を上げられなかったという思いで申し訳なく思っている。この取り組みの中の5歳児クラスの子どもたちは、その年の3月に卒園し4月からは小学校に入学している。彼らは、この取り組みをどう評価して卒園していったのか、最後には聞いてみたかったが、残念ながら聞けていない。そして、彼らの課題を少しでも解消出来たのだろうか？追跡してみたいとの思いを持った。

取組中に、私には聞こえてこなかった、子どもたちの声も、沢山直接聞いていた担任の平田先生の感想を掲載したい。

『5歳児は、自分の思いをストレートに身体で表現したり、友達にぶつける子が多く、言葉を使って相手に伝えたり、気持ちをコントロールすることがなかなかうまくできない弱さがありました。そこで、今回の取り組みで、「ともだちと一緒に遊ぶ楽しさ」「やりたい気持ちをルールの遊びをとおして育てる」そして、「自分たちで遊びを作っている集団へと高まっていけばいいなあ」とタグラグビーで遊んでいきました。

はじめは、タグをつけて走る」とや追いかける事は、しつぽりのようで楽しかったのですが、一対一の勝負となるとタグをとられるのが嫌で泣いたり、チーム対抗では、自

分の番が終わると気持ちが途切れるといった姿がありました。相手をよく見て方向を変えて逃げたり、すばやくタグをとる動きを知らせる中で、「そうやったらいんや」「やれるかな」と、少しずつ積極的に取り組み姿が出てきて、できたことが自信になっていきました。だから、タグをとられても「次はいけるかも？」と気持ちを立て直したり「点数分かれへん。得点表あればいいな」と、遊びを進化させていきました。そうしていくことで「一点入ったで！」「線こしたのにタグとつたからずるい」と、同じように泣いたり怒ったりトラブルながらも、原因の質が違っていきました。ゲーム本来の楽しさに目が向いてきたからでしょう。チームを応援したりルールを元に発言する姿も出てきました。交代で副審を担当して反則があれば、イエローフラッグを投げるという役や得点係も自分たちで行いました。大人の手助けを貰いながらも、自分たちであそびを作っていく楽しさを感じながら役目をこなしていました。

約3ヶ月間、取り組んできた中で《みんなであそぶっておもしろい》《こんなふううに友だちに教えたらうまくいった》《負けたらくやしいけども最後までやろう》と仲間と一緒に遊ぶ事で身体も心も成長してきたなと思います。まだぶつかりあいや思いをうま

く表現しきれないところもありますが、引き続き来年度もタグラグビーを楽しんでいきたいと思います。』

自分が思っているほどの結果が伴わず、少々がっかりしていたのだが、この編集作業や、担任の先生の感想を聞き、あらためて教材の有効性と可能性を感じた。

6. 体育あそびのねらいは？

体育教材Ⅱスキルの上達を一番の狙いとするのが普通だが、幼児期4・5歳の困難さは一筋縄ではいかない。様々な情緒不安の要素が個人だけの問題にとどまらず集団に悪い影響を及ぼしている。この問題行動に着目し、課題克服することをねらうことで集団としての成長を促すことに繋がるはずである。今回の取り組みは、まだまだこの課題克服には届いていない。そのため集団としての成長は遠い先のことのように思うが、この映像の中にあつた子どもたちの姿に可能性を深めることが出来た。集団作りは、得てして道徳的な色彩が強い様に感じる。そうではなく、体育教材を通して、スポーツ教材の魅力で、他人を思いやり、自分の役目を果たす。そして、絆を深め達成感や充実感を味わう。そして、他者を認めたり自己肯定感を持つこともできる。そ

んな積み重ねの中で集団が出来あがるはずだと思っている。

そういった力は、5歳児の運動会後にうんと付いていくという風に言われている。そこで、園としても、小学校への接続を意識しての取り組みもあるようだ。でも、5歳児に唐突に、運動会後の卒園前の時期に、意識してクリアーさせようとするのではなく、3・4歳時期から意識して取り組んでいくことが大事なのではないかと感じた。そういう意味では、この園が毎年4・5歳合同保育をしているのでは、課題克服のための保育は組み立てにくいのではないかと思う。勿論園の運営には事情もあり仕方のないのだが。

書き出しで、K君のことを書いていたのと離れてしまった感もあるかもしれないが、実はK君は、一昨年度のトラブルメーカーの一人だったのである。行動が衝動的で、暴力的だったので、年上だろうが気に入らなければ食ってかかる、殴りかかる。我慢が出来ないので気に入らないことを言われれば、女の子にも手が出るのですぐに泣かせる。勝敗にこだわり負けず嫌い。でも気持ちと実力に差があるので、勝てないことも多いが素直に負けを認めない。3月に5歳児が卒園し、新たな4歳たちと新しい集団に変わったので、集団の雰囲気が変わった。新しい5歳たちはリィダシップを取り自信を深めたり、年下への配

慮(優しさ)を感じられるようになった子もいる。だが、K君は相変わらず、まだまだ課題が多い。春からの取り組みの中で様々な試みをしているので、これからというところであり、水遊びも大きな変化を期待できる取り組みの一つだったのだが…。お受験では学べない大事なことが学ぶことができると思っているが残念で仕方がない。園としても保護者に伝えているが、保護者の理解が得られないということのようである。

7. バランスよく育つこと

格差社会が全世界中に広がり、将来が見えにくく生き辛い。そこで親はわが子の将来のために、出来るだけの環境を整えようと一生懸命になる。K君のようにお受験を経て私立小学校からエスカレーター式に有名私立学校路線を歩ませようとするのも方法の一つだろう。将来有名大学を卒業し良い会社に入り高収入を得るために苦勞する。どうせ苦勞するのなら、ハードルが低いと考える小さい時に、お受験させてあげるのが親として出来る最大の援助として考えているのだろう。この辺の事情を調べてみることにした。

私立小学校の受験のペーパーテストでは数量・記憶・言語・図形・常識・推理・思考などが問われるそうである。そのために『年少ク

ラスは「どうなっているの?」「おもしろそう!」という興味を引き出し、年中クラスはゲームやクイズ形式を取り入れた楽しいカリキュラムで理解を深めていきます。そして年長クラスはペーパー教材を中心に、解答スピードや応用力をつけるなど、受験に即した授業を行います。幼児教室ではペーパーを「与えて覚えこませる」のではなく「考えさせて教える」授業を実践しており、年少時より段階的に成長することができません。』と、言ったような説明がなされている。その他には、絵画制作、聞き取り、話し方、応用自在、行動観察と体操などが受験科目にあるようだ。ちなみに体操では、元氣よく歩く・走る・飛ぶなどの基本的な動きから、鉄棒・マット・ボール・縄跳び・平均台などが受験科目だそうだが、指示行動といった物も含めて、『運動能力や技術の向上だけでなく「聞く」「見る」「待つ」を基本として、最後まで諦めずに頑張る心(精神)も鍛えます。』できるよ!になる」
「できるまで頑張る」ことが、小学校受験には不可欠なお子様の「自信」へとつなげる』と、ここまで調べてみてわかったのは、いわゆるお勉強でつけられた知識や技術が、お受験によつて優劣が付けられ合否が判定される。そんな風に思っていたが、どうもそれだけではない。「あたま」と「からだ」だけではない

ということだ。それらは、集団行動の中での協力、共同、コミュニケーション(許す、譲る、我慢する・積極性、けじめ等)、とつさの判断力、粘り強い気持ち、自信などが重要とされていることが分かる。中には知識と知恵と言われる部分もあるので分けにくく、「あたま」の部分だと思われるが、それら以外の気持ちなどの部分は「こころ」と分類されると思われる。これら3つの力は、年齢と経験を重ねていく中でバランスよくつけられていくはずだろうと思う。それが、昨今の保育現場では、他園との差別化を図るために、様々な特色づくりを行っている。国語や算数、英語などの学習や器楽演奏、体操、水泳、茶華道といったお稽古(こと)のレベルが目白押し。その他にも行事(こと)が山のようにあるので、普通の保育(?)の時間が取れないというのだ。子どもらしい時間を過ごす時間が無い。これではバランスよく育つことは難しいのではないかと感じる。どれかの力だけ伸びていき、どれかの力が付いていかなければ、何らかの問題をやらんでしまうと考えるのが普通なのではないだろうか。

8. わたしたちはどう考えていくのか

幼児期段階でのいきすぎたお勉強(早期教育)への疑問。スイミングや体操教室の疑問。

これらは、習い事から、園の保育や教育の身として取り入れられている園が増えていく。このことに対し、「あたま」と「からだ」は一緒に伸びていくという当たり前のリズムが阻害される。私はこのような現状を捉え、バランスが崩れていくことで、問題が生じる危険性があると警鐘を鳴らしてきた。

① 「からだ」の育ちについて

前項でも述べたように「あたま」「からだ」「こころ」と3つに子どもの成長の中身を分類できるが、もちろん、それぞれが別々に成長していくわけではなく、複雑に絡み合いながら伸びていくものである。だから分けて整理していくというのは得策ではないだろうが、考えやすくしていくために分けて整理していくことにする。

3つの成長は、子どもとしてその時々子どもらしい生活の中で、遊びや生活の中で自然と身についてきたものだと思う。それが生活様式の変化等で、「からだ」の育ちのおかしさに気づいた。そこで保育の現場で様々な取り組みが始まった。それらはリズム運動や器械運動などに。そして運動会の発表へと流れや取り組みが広まった。このような流れで多くの保育の現場では「からだ」の育ちそびれを克服させ成果も上げてきた。しかし、今では、そんな保育を作り上げてきた、先代た

ちの論議や検討を抜きにして、形や成果だけを求められることになっていやしないだろうか。その結果いわゆる伝統が後輩たちや若い世代に重しとなってやしないか？各現場で点検が必要ではないだろうか。『こんなこと知つて(分つて)当然よね？』と、傲慢になつていないか？『こんなこと聞いたら笑われる(怒られる)んじゃないか？』と、物言わぬ保育士になってやしないか？そんな現場ではなく、様々な年代や立場を乗り越えて自由に発言できる。そんな会議での丁寧な論議を大事にしていくことを伝えたい。そこが抜けてしまうと、形だけが独り歩きして「なんのために？」がぼやけてしまう。すると、なぜ「逆上がり」や「棒登り」をさせるのか？なぜこの年代なのか？正しい意味や意義を理解せぬまま。運動会のために、運動会に向けて、その種目を出来るように、その種目を教え込むことになる。うまくさせることが目標になる。出来なかつたことが出来るようになることは、とても凄いいことで、大事な取り組みに違いない。そして、そのことで自信を掴み、色々なことに波及していく。そんな効果は十分考えられる。だからこそ、現場は運動会を大事な教育活動として捉えている。

しかし、世の中の流れと共に、子どもたちは年々変わっていく。なのに毎年のこととして、論議を大事にせずに検討が不十分にな

る。すると、とたんに前述したような問題が大きくなっていく。運動会のためにうまくさせようと保育士も保護者も必死になる。結果が出せないと、保育士としての指導力が問われる。園としてのメンツも立たない。とんでもないプレッシャーを抱え、子どもへの無理強い、非科学的な指導で子どもたちを混乱させ、プレッシャーを与える。「子どもが主人公、子どもが輝く運動会」はどこにかすみ子どもも保護者も保育士も全ての者たちが疲れ果てる。「からだ」を育てるために「ころ」が弱っていく結果に繋がりに、バランスの良い育ちに歪みを起こしかねない。

そこで、保育の中で「からだ」に関わる部分を育むためにはどのような活動が必要なのか？保育の中身の吟味はもちろんのこと、なんのために？どのように？と毎年論議を丁寧にしていくこと。運動会のため〇〇を〇〇でやり方を教えるのではなく、どんな力を持った子どもたちを育てていくのだと、そんな当たり前のことを現場に提起したい。

そのような時に、検討材料の一つとしての資料を次頁に紹介する。これは、普通の環境で育つた子どもであれば5歳頃には、80を超え運動パターンが出来るようになる。それは、程度は違えども、成人レベルと同じ動きの教だと赤塚徳郎が「運動保育の考え方」

赤塚徳郎編著(明治図書) 1984年P 68
で整理している。その表を元に、各運動パターンの出現時期を年代時期と種類ごとに見やすく分類したのが次の表である。各現場での取り組みを、表を元に整理見直し検討する材料としていただきたい。

これらの力が付いていけば、その力に応じた教材を取り入れても、その教材に必要なとなる「からだ」の力は、改めてつけなくても、身につけているのだから、少しの練習で、やり方やコツを学び出来るようになるはずだ。

② 「あたま」と「ころ」の

育ちについて

前項で述べた様に「からだ」の育ちを意識して取り組んでいる園では、他の二つの育ちとバランスが取れていて問題はないのか？残念ながら、「生活様式の変化」とともに「遊び文化の変化」の影響は大きく。「あたま」や「ころ」の育ちそびれに繋がっていて、問題が出ている所も多いのではないかと。ヨコミネ式保育とか、体操教室やスイミングといった業者の入りこんでいる現場での問題については、今までも取り上げてきたし分かりやすい。しかし、そうではなく子どものことを考え保育してきた園でも一筋縄ではいかない。そんな姿

カテゴリ	平衡系 14		移動系 27			操作系 42							
	姿勢変化 平衡動作 14		上下動作 9	水平動作 11	回避動作 7	荷重動作 13	脱荷重動作 5	補促動作 11	攻撃動作 13				
各々の動作	0												
	3												
	4												
	5												

(表1)「運動保育の考え方」赤塚徳郎編著(明治図書)1984年P68を竹内が整理してみた物。

は、冒頭で紹介した園の子どもたちの姿程ではなくても、よく見られる最近の子どもの姿ではないだろうか？ここで私が言っている「あたまはペーパーテスタの知識ではなく知恵の部分である。お勉強の課題は小学校以降に譲るとしても、とつさの判断力や応用力などは、遊びなどの経験を通じていく中

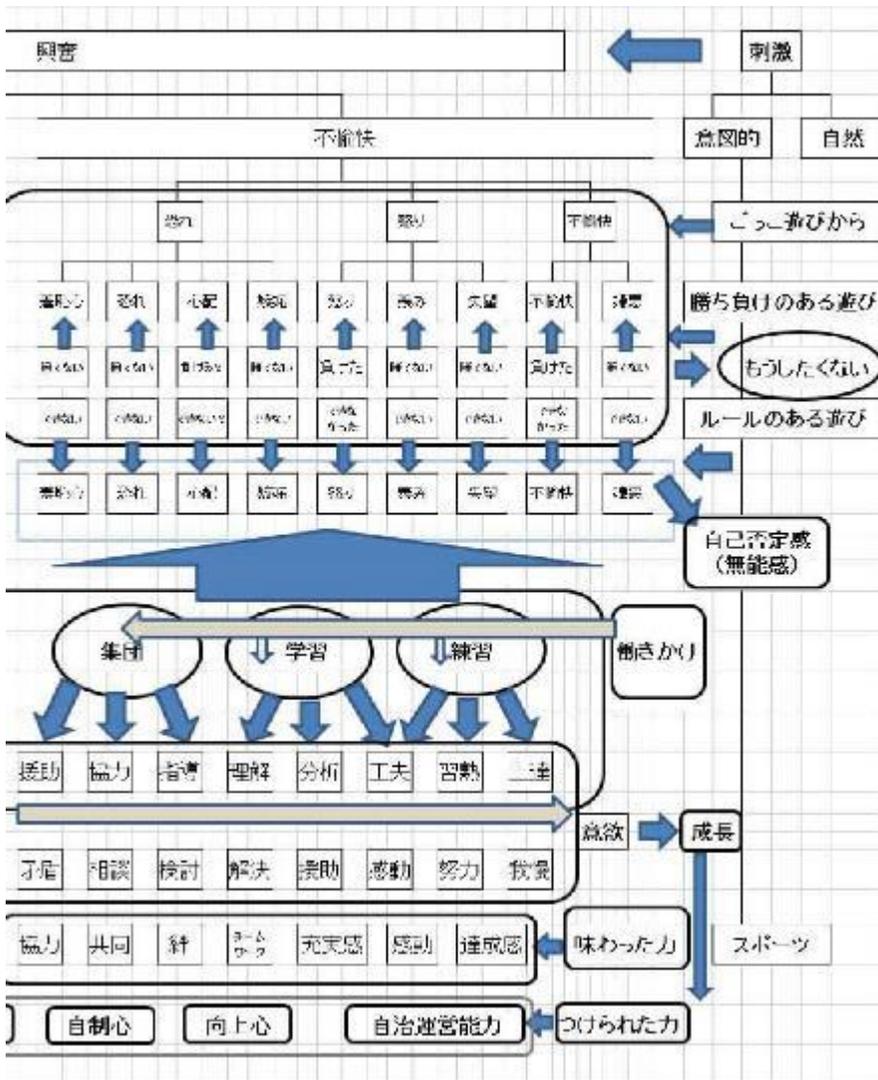
で、自然と年長者や仲間の姿から見て学び、考え行動していく中で身につけられるものなのだ。他児からの言葉や態度にプライドが傷つき、うまく言いかえしたり出来ないで怒って泣いたり手が出たりする。また仲間に対する優しさに欠け、人を馬鹿にしたりののしつたりで相手を傷つけてしまう。そのことに気づかず喧嘩になる。失敗して馬鹿にされるのが嫌で、自信が無いのでやらなかったり強要されると泣いて拒否する。負けることが嫌いなので負けるとわかつている勝負はやらないし、たまたま負けたりすると立ち直れない等々。これらはまさに「ニコロ」の育ちそびれであると思うが、経験不足以外の何物ではない。これらはまさに「ニコロ」の育ちそびれであると思うが、経験不足以外の何物でもない。遊び文化の変化により、「勝ち負けのある遊び」や「少し複雑なルールのある遊び」などを経験する機会が少ない。そのため弊害が出ているのだと思われる。お受験のための塾で、知識の部分のお勉強や絵画教室のテクニックを学ばせたいという親の願いと、同等のレベルで本来は保育の現場でついているはずの「あたま」と「ニコロ」の力までを塾が教えているとなると、保育現場としては考えていかなければならない。

次頁に示した表は、心の成長に、様々な要因を加えて、整理して竹内が作ってみた表で

ある。ノーマルに育っていく子どもたちと、何らかの要因でそうならず、課題を抱えながら課題を大きくしていく子どもたち。放置しているだけでは育たない。「昔と子どもたちは変わったから」と諦めずに、意図的な保育への

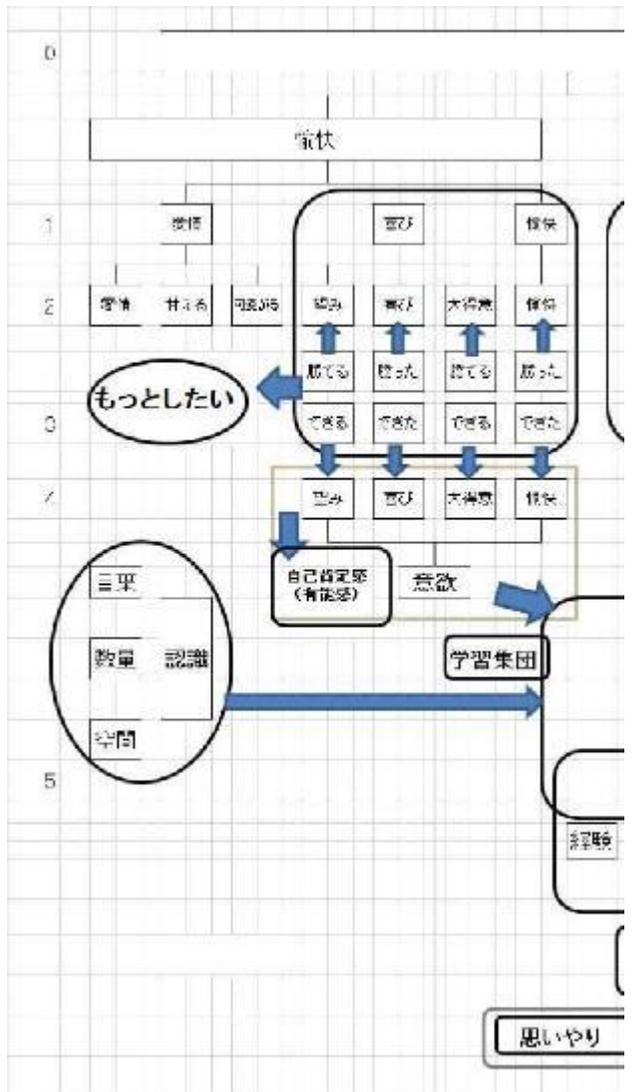
変化を加えることで、子どもたちに刺激を与えていく必要性を感じる。次の項目でその事に焦点を当て進めていくことにする。

9. 意図的な保育の勧め



自分の気持ち(感情)をコントロールできない子どもが増えている。自我が芽生え生活の中でトラブルを起こすようになる。その事は誰もが通る道なので、逆に自己主張のしない子どもが気になり、問題視することもある。しかし、強烈な自我というべきレベルで我が儘放題の子ども達も目立つようになってきている。自分の身体をコントロールできない子は、自分の気持ちも達の保育にあたってきたが、強烈な自我を表面化する子ども達の中には、ADHDや高機能自閉症などの発達障害の子ども達も含まれる可能性がある。集団の中で、それらの子どもが数人いる場合は、二次障害に繋がったり、周りの子どもたちに連鎖反応していくこともあるので大きな問題になる前に対処していきたい。

保育の場面では、「順番を守れない」「おもちゃを独占する」「負けるとパニック」「友達への配慮(優しさ)が足りない」「すぐに手が出る」等々。逆に負けることが嫌で「勝てないことを避ける」「負けるからと最初から諦めてやらない」「失敗して笑われるのが嫌だからやらない」そんな子ども達もいる。これらの子ども達は、えてして経



験不足が考えられる。家庭や保育の中でそのようなあそび体験が不足している。勝ち負けのあるようなあそびや競争は、子ども達にとって重要な活動ではあるが、勝者がいれば敗者がいる。プラスの効果も期待できるが、当然マイナスの要素も考えられる。それが諸刃の刃でもある。そんなマイナスの要素が起こると、トラブルが発生し解決していくのが大変だから、実施しない方が楽だ。そんな風に考えているかも知れない。実際保育現場の先生に、その様な保育を勧めると、「あまりにもトラブルが多くて毎日

が大変だ。やらなくて良いならやりたくない」と泣き言を言われることもある。特に問題が頻繁に起こる集団に、そのままおろすだけだと火に油を注ぐ感じにさえなりかねない。ある保育園の4歳クラスで、20人の子どもと先生二人の保育を観察したところ、6人くらいの子ども達が中心になり、40分ほどの保育中に30回以上のトラブルが発生した。まさに修羅場の連続で、周りの子どもにも危害が及ぶようだと中止せざるをえないが、そのぎりぎりのところで踏みとどまるぐらいのレベルだった。これらの

6人の子どもの中には、正式な診断は下っていないが何人かは何らかの発達障害の可能性はあるとみている。統合保育の範疇を超えたレベルかも知れない。ただ健常児の中に障害を持った子どもを入れて保育すれば良いというだけでは、放置や投げ入れとも取られない。

前述したクラスは極端な例だが、そこまですべてで大変でなければ意図的な試みを施していくことが効果的であると思う。昔であれば、地域や家庭の異年齢集団であそびの中で、自然と身につけていった力がついていないのだから、意図的に保育現場で仕組む必要があると考える。例えば、

①「じゃんけんによるチーム分け」は、民主的だがチーム力に差が出ることもあるので、最初は先生が均等になるように分けていく方が望ましい。また、子ども同士の相性のことも問題になるのなら、分けておくなどの配慮も必要。

③「じゃんけんによる順番決め」も、①と同じ事が言えるので同等レベルの子ども同士（勝つ時もあるが負ける時もあるように）が対戦できるような決め方をしておく。

④「ルール作り」ある程度落ち着いて実践が進んでいくようになれば、矛盾が起こった時話し合いでルールを作っていく事

も必要だが、トラブルを未然に防ぐためのルールは明確にしておくことが必要。

⑤「有能観や成功体験を大事に」シュートが決まった喜び、勝った時の嬉しさを十分に味わわせる。そのための仕組みを考えること。

⑥「台本の必要性」実践の進み具合や、子どもの特徴に合わせて、勝ち負けを調整したり、保育士が手加減することも必要。
⑦「混乱を防ぐ」使用する道具やその他準備物など、色分けや数字入りなどで分かりやすくすること。ルールや、やり方の説明は、一つずつ具体的に例示しながら行う。

といったようなことが考えられる。そして、実践の進み具合に合わせて、それぞれの子ども達の実態に合わせて変えていく。勝負は偶然性が前提でなければおもしろくないのだが、実践の最初は偶然性に頼るだけではトラブルは防げない。結果等も意図的に仕組んだ上で、実践していくことを勧めたい。

10. Kくんのその後

8月中お休みして塾通いしていたKくんは、水あそびはもちろんのこと、並行し

て始まった運動会の練習にも参加できずに9月に園に戻った。実際にその場面を見たわけではないが、5歳児の運動会は、保育園生活最後の運動会なので大忙し。リレーや表現、民舞や竹馬と練習を積まないと出来ない物ばかり。特に竹馬は出来る子と出来ない子の差は歴然である。Kくん以外は、ほぼ全員が乗れている段階で、練習に全く参加していなかったKくんが乗れないのは当たり前なことである。去年までのKくん、周りの子ども達も4歳児クラスの時のような集団であったなら：：こうはならなかっただろうと思うのだが。竹馬に乗れないKくんをみんなが気遣い、入れ替わり立ち替わり、アドバイスをしたり励ましたりしてあげたそうだ。去年までのKくんであれば、周りの子の申し出を素直に受け入れたらどうか？周りの子も優しく支えようとしたらどうか？本人も集団も成長していたんだと確認できた。運動会当日、みんなと同じように晴れ晴れとした表情で乗りこなしていたKくんの姿が嬉しかった。

昨年度は、4月より4・5歳児クラス担当の教員のサポート的に、月2回のペースで体育あそびの支援を行った。幼児担当が初めてという、前任校時代の教え子であった。年度当初参加した研究会での「ネコちゃん体操」と「側転指導」に感激していた

こともあり、「マットあそび」と「ボールあそび」を柱に年間を大きく捉えて進めていくことになった。「ボールあそび」は、保育教材として面白い物であると、私が現在推奨している「ドーナツボール」(左記説明図)を使って行うことにした。前年度からの絡みで、集団でのからだを使つての体育あそび活動が、Kくんを取り巻く集団や、K君自身が前記したように運動会での取り組み



100円均のseriaで販売されているフルスティックを型紙に合わせ切る。↓



↑
真ん中の穴をPPロー75mm以上で、つなぎ輪っか状にする。

た事になったと思う。

Kくんは、私立小学校の受験に合格した。園長先生は、運動会の練習に遅れて参加した時、昨年までのKくんであれば、あの運動会当日の姿はなかっただろう。そんな姿に変わったのは、K君を優しく迎え支えてくれる、仲間集団があったからなんだということ。まだまだ課題を抱えているみんなだからこそ、保育園時代の仲間をベースに、地域で育っていくことが大事なんではないか？と説得したが、保護者は彼の成長は塾に行つたからだと思つているようで、地域を離れ一人電車通学したつて大丈夫だと言つていたようだ。さてその後の彼の進路は、いかに？

11. ドーナツボール実践では

この教材は、元テーブルで浮き輪代わりに用いることも出来る商品である。100円と安価であること、非常に軽く柔らかい素材で出来ていること。カラフルであることなどで、教材として利用しやすい物である。この商品をドーナツ状の形態に変えることで、ボール代わりに利用し「ボールあそび」が実施しやすいと思つた物である。今まで幼児期のボールあそびでは、投げることは取り組みのやり方によって、上達すること

の際、成長が確認できたことに繋がつたと思われる。これは、3月に5歳が卒園し、新しい4歳児と一緒にした事も影響したかも知れない。新4歳児の中にも、精神的な成長に課題を持つている子どももいたが、卒園した5歳児達とは比較にならないくらい落ち着いた集団であつた。それでも、Kくんを始めとした成長仕切れてない新5歳児と一緒にしたことで、担任が変わつたことでの力試しなどで、落ち着かない集団になつてしまつていた。そういったことでトラブルはなくならず、担任は、自信喪失と見通しが持てないことでの焦りで、何度もつぶれかけていた。「去年までの集団に比べたら、全然ましたよ」「確実に成果は出始めているよ」と支え励ましてきた。と言いながらも、相変わらず思つたような形で実践が進まないこともあり『大丈夫かなあ？』と不安を抱えていたのは事実だつた。でも、短刀直結で結果は出てなかつたけど、運動会での取り組みの様子と、その後のドーナツボールの進展度からすると、まさに5歳児の運動会後に、色んな課題を克服し大きく成長していく時期である。そう言われていることが、実感できた。当然ながら、何も手を加えていなければ、ただ「この時期が来れば、そうなるんだ」なんて事は無いのであり、当然2年間の取り組みが花開い

が分かつてきた。ただし、キャッチするということとは非常に難しく、習熟させることより高いボールは受けることは出来ない。その様に研究成果がある」と言うことも教えて頂いていたが、そのまま鵜呑みにするのではなく、『教材を変えれば？』『スモールステップを踏めば？』と考えていたので、このドーナツボールが役に立つかも知れないと直感したのだつた。

その理由としては、

① 軽くて柔らかい素材であること

② 風の抵抗を受けやすいこと

③ 柔らかくゆっくり飛んでくるので恐怖感が無いこと

④ ボール本体をキャッチできなくても、輪っかの中に手が入ることで受けやすいこと

⑤ 綺麗な目で目立つし楽しそうなど、初めて子ども達に、見せた時『なんか楽しそうなが始まりそう』と直感的に伝わつたようで、どの子も目を輝かせた。その後も保育時「今日はドーナツボールするよ」と言うと「やった！」という歓声が上がり、「賢くせんかったら、ドーナツボールする時間短くなるよ」の保育士の声に反応して行動に自己制限かける姿も見られた。

この取り組みを行う前に、園側に「ドーナツ

ドーナツボールに必要な技術的要素等を整理した表									
ドーナツボールで必要な技術的要素	投げる		走る	じゃま	かわす	受ける	認識		
①ドーナツリレー			速く	投げ方			ルール	回って帰る	
②ドーナツシュート	シュート	両手で	競争	①輪投げ型				線を越えない	
③シュート練習		片手で		②ボール投げ型				2回まで	
④キャッチボール		入れる		③フリスビー投げ		止まって		コーンを回る	
⑤シュート練習		狙う	走って	④縦投げ				順番(タッチ)	
⑥ロングスロー		遠くに	走りながら					得点する	
⑦キャッチ&シュート		パス&シュート	走りながら	変化	コース	防ぐ	素速く	止める	防御する
⑧リードパス&ランキャッチ	せりあって		ストップ		跳んで	上下	跳んで	時空間認知	
⑨かわしてシュート	パス	人に	リズム	奪う	フェイント	奪う	チーム練習		
⑩コンビプレー		場所に	速さ		タイミング	確実に	コンビプレー		
⑪ハーフコート3対2	パス&シュート	隙を見て投げる	タイミング	背中を守る	上下	パスを要求し受ける	戦略・戦術	パス	
⑫ハーフコート2対2			守備	マンツーマン	フェイント			作戦を立てる	
⑬オールコート2対2			速攻	チームプレー	タイミング			攻守切り替え	
⑭ポートボール型 (3対1) (攻撃側複数人数複数ボール性)	シュート	優しく味方に	左右回転	左右上下	隙を見て	台の上で		声かけ・協力	
⑮ポートボール型 (3対1) (攻撃側複数人数ポーナースポール性)	パス&シュート	隙を見て投げる	左右回転	左右上下複数人に	相手の裏へ動いて	敵の裏で		チームプレー	
⑯ポートボール型 (3対2) (攻守同数ボール一個)	パス&シュート	受けてすぐ投げる	左右回転	左右上下複数人に	相手の裏へ動いて	敵の裏で		作戦会議 チーム練習	

「ナツボール系統性試案」の表と「ドーナツボールで必要な力を整理した表」を提示し、説明して実践に入った。

保育案は、担任が立て、その保育をビデオ撮影しながら見守る。実践後、園長先生、副担任(4歳児担当)を交え四者での反省会を行う。

その会では、担任からの実践してみている感想や反省など。園長や副担任が気がついたところを話す。そして最後に私が今回の保育で抑えておくこと。次回には改善しなければいけないこと。その流れに



ついでに確認事項を話して終わる。全体で一時間ほどの会であった。給食後、後片付けやお昼寝の準備やお昼寝の間に、担任・副担任・園長がクラスから抜けれる時間を月2回保証していくのは大変だっただろうが、とても良い取り組みであった。どこの園でも幼児クラスの担任は常にプレッシャを受ける。経験者なら良いが、経験の少ない者

にとつては、大変なことが多い。相談することや、アドバイスを受けることさえまならずで大変な思いをしている。園で人材を育てていくという余裕が無いのが実情のようだ。今回のようなケースはまれなケースであるが、一つの参考として広まっていければ良いなあと思う。

12 おわりに

結局ドーナツボール実践は、大成功に終わった。ただし、保育園は忙しい。そのため運動会後の時期に、月2回の訪問日が1日になったり、訪問日と訪問日の間にも、ドーナツボールをしていくということが難

しかった。また、間が開いてしまので担任と意思疎通がうまくいかず、ドーナツボールの、その日の保育の狙いがずれた取り組みになってしまうこともあった。そのため保育中に、保育の流れを修正することもあった。

ドーナツボール系統性試案



そういったことも影響し、試案通りにはいかなかったことも多い。それでも⑩ぐらいまではなんとか進んだが、最終的には時間切れになってしまったので、⑩の後⑭になったが、結果的には⑩から⑬は難しかったかも知れない。最後のビデオには、3人の子ども達が一人一つのボールを持って、先生のDFをかくぐりながら、台の上にいる味方にパスを試みる。そんなドーナツポートボールが完成した。そこでは3人でのチームワークが見え、DF役の担任もたじたじた。その中で自然発生的に出た。パスは、私にとって大きな発見であった。ボールを持つ子が3人。全員が成功すれば3点獲得する。メンバーの一人が欠席すると二人が攻めるが、全員成功しても2点しか獲得できない。『どうしようかな?』と考えていると、子どもが「一人が二個持てば良いやん」との解決策を提案。なるほどと採用した。すると、一つしか持っていない子が成功したが、二つ持っている子はまだ一つも投げていない。DFはその子だけマークす



れば良いのでなかなかチャンスが訪れない
すると横で応援して見守るだけだった味方
に「はいっ」とパスを渡した。その瞬間マ
ークが二人になりDFが動いた途端チャン
スが訪れシュートが成功したのだ。紙面の
都合でこれ以上詳しくは語れないが、いま
でパスを教えることは有効な手段になり得
ず、出来る子とそうでない子の差が歴然で
あったが、今回の発見は次への実践のヒン

トになりそうだ。小学校低学年の体育教材
として、試してみたいと思った。

最後は紙面切れの感もあるが、私がこの
文章で伝えていきたかったこと。バランス
良く育つためには、今までのような形の保
育や教育ではなかなか簡単には解消してい
きにくい。ヨコミネ式保育のように、子ど
もという生き物は①競争したがる②真似を
したがる③ちよつと難しいことをしたがる
④認めて貰いたがる。その4つのポイント
を抑えていけば勝手に子どもは伸びていく
んだと捉えていると、いびつな子どもの育
ちには解消されない。その時には凄いな子ども
に見えるが、本当に凄いつてどんな子ども
なのだろう？1秒間隔で8段の跳び箱を跳
べたり、ブリッジから逆立ちをして歩き回
れるような子どもではなく、それはその
年齢に見合った子どもらしく、バランスが
保たれた成長をしている子ども達なのでは
ないだろうか。

しかし、子どもたちを取り巻く環境は極
めて厳しい。家庭でも地域でも放っておく
だけでは、なかなか厳しい現状がある。世
間や保護者にはなかなか本物の目を見極め
るための情報が届かない。私たちはただ手
をこまねいてため息をつくのではなく、本
物を見極めるための一つの手立てとして、
発信していきたい。だからこそ、今の困

難な時代を乗り切るには、必死で頑張っ
ている保育士たちを支援、意図的な保育（教
育）を説いていきたい。その一つの例示が、
今回の2年間にわたる保育所との共同実践
の取り組みにあると思われる。今後も引き
続き検証していきたいと考えている。

